

IV-41 スタジア法におけるロッド・インクリネーションについて

防衛大学校土木工学教室 正員 加藤清志

1. 極概 スタジア測量を行う場合、複雑な地形にもトラバースを組む必要がないという事実から、峡谷や水面上を平地と同様容易に距離測定が可能である。また迅速な点でスタジア測量の大きな利点もある。路線測量、地形測量等には最適な方法ではあるが未だ理論的に不明確であるため無意識のうちに利用していて、実は充分考慮しなければならないロッド・インクリネーションに関する数点を解明し、意義及び重要性を認識出来る様にしたものである。

2. 傾斜視準線と夾長との関係 図-1において上半の大さAOと、下半OBとの関係を考察する。正弦法則及び級数展開を適用して次式を得る。

$$\frac{AO}{AO} = \frac{\sin\{90^\circ + m\}}{\sin\{90^\circ - (a-m)\}}, \quad \frac{BO}{BO} = \frac{\sin\{90^\circ - m\}}{\sin\{90^\circ - (a-m)\}} \quad \therefore \frac{AO}{OB} = \frac{1 + m \tan \alpha}{1 - m \tan \alpha} = \phi(\alpha)$$

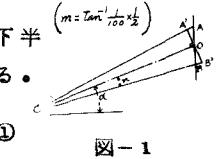


図-1

①式は α のみの関数であるから予め作表し得、下半又は上半から上半又は下半が求まる。

	0'	30'	0'	30'	0'	30'	0'	30'	0'	30'
0°	1.0000	0.8980	10°	0.8876	20°	0.8659	30°	0.8359	40°	0.8034
1°	0.9999	0.8979	11°	0.8867	21°	0.8648	31°	0.8348	41°	0.8023
2°	0.9997	0.8976	12°	0.8855	22°	0.8635	32°	0.8335	42°	0.8012
3°	0.9993	0.8971	13°	0.8842	23°	0.8623	33°	0.8323	43°	0.7999
4°	0.9988	0.8965	14°	0.8829	24°	0.8612	34°	0.8312	44°	0.7984
5°	0.9982	0.8959	15°	0.8815	25°	0.8601	35°	0.8301	45°	0.7969
6°	0.9975	0.8952	16°	0.8801	26°	0.8589	36°	0.8289	46°	0.7952
7°	0.9967	0.8944	17°	0.8786	27°	0.8576	37°	0.8276	47°	0.7934
8°	0.9958	0.8935	18°	0.8770	28°	0.8563	38°	0.8263	48°	0.7915
9°	0.9948	0.8925	19°	0.8753	29°	0.8549	39°	0.8249	49°	0.7895
10°	0.9937	0.8914	20°	0.8736	30°	0.8535	40°	0.8235	50°	0.7874

表-1

表-1において各項の上段は $\phi(\alpha)$ 、下段は $\phi(\alpha)^{-1}$ である。
夾長を下半の2倍とした場合の水平距離及び高低差の精度については、

$$\Delta l = l - 2 \cdot OB = \frac{m \tan \alpha \cdot 2OB}{1 - m \tan \alpha}$$

$$E = K \ell \cos^2 \alpha + C \cos \alpha, \quad H = K \ell \sin \alpha \cos \alpha + C \sin \alpha \quad \text{を } l \text{ について微分し } dE = K \cos^2 \alpha \cdot dl, \quad dH = K \sin \alpha \cos \alpha \cdot dl$$

以上から、 $\frac{dE}{E} = K \cos^2 \alpha \cdot \frac{dl}{l} = \frac{dl}{l} = \frac{m \tan \alpha \cdot 2OB}{1 - m \tan \alpha} / 2OB = m \tan \alpha = \frac{dH}{H}$

…② 即ち水平距離及び高

低差の精度は緯角の関数であり、②式から表-2にその大きさを示す。但し加定数は0。

上半を2倍して夾長とした場合も全く同様に推論され、表-2

$$l = \frac{2 \cdot AO}{1 + m \tan \alpha}, \quad \Delta l = - \frac{m \tan \alpha}{1 + m \tan \alpha} \cdot 2AO, \quad \frac{dE}{E} = \frac{dH}{H} = -m \tan \alpha$$

(%)

α	0°	2°	4°	6°	8°	10°
0°	0.0174	0.0357	0.0525	0.0702	0.0881	
10°	0.0881	0.1620	0.2446	0.3253	0.4026	0.4819
20°	0.1819	0.2020	0.2226	0.2438	0.2658	0.2886
30°	0.2886	0.3124	0.3372	0.3632	0.3946	0.4415
40°	0.4195	0.4502	0.4826			

等となる。水平距離及び高低差の補正量は図-2で表わされ、仰角の時下半、上半の採用に応じ加算又は減算し、俯角の時下半又は上半の採用に応じ、減算又は加算する。

3. ロッドが鉛直でない場合の夾長、距離算定式並びに精度等について

図-3を参照して正弦法則及び級数展開により、

$$\frac{A'C}{BC} = \frac{AC}{\sin\{90^\circ - (a-m)\}}, \quad \frac{B'C}{BC} = \frac{BC}{\sin\{90^\circ - (a-m)\}}$$

$$\frac{A'O'}{O'B'} = \frac{1 + m \tan(\alpha - \eta)}{1 - m \tan(\alpha - \eta)} \quad \dots \text{③} \quad \text{傾斜ロッドにおける上半と下半との関係} \quad \text{③式は } (a-\eta) \text{ のみの関数である}$$

つて表-1をそのまま利用出来る。

$$\frac{a'+b'}{2} = mc' + \frac{m\ell}{2} \tan(\alpha - \eta) = \overline{mc}, \quad \text{また } 2m = \mu \quad \text{として } l = \frac{\tan(\alpha - \eta)}{\cos \alpha} [l' + \mu \overline{mc} \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \}] \quad \dots \text{④}$$

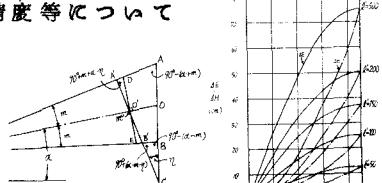


図-2

図-3

④式は傾斜夾長と修正夾長との関係式である。また両者の差を最大とする様な傾斜角 η を求める。 $\frac{\partial \Delta l}{\partial \eta} = 0 = \frac{1}{\cos \alpha} [l' \sin(\alpha - \eta) + \mu \bar{l} \cos(\alpha - \eta)] \therefore \tan(\eta - \alpha) = \mu \frac{\bar{l}}{l'} = \theta$

… ⑤ 傾角の場

合も考慮すると⑤式から、 $\eta_m = \alpha \pm \tan^{-1} \theta$ (+仰角, -俯角) となる。

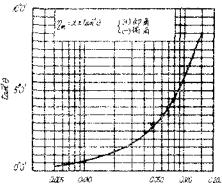


図-4

図-4は θ に対応する補正角との関係である。さらにある縦角に対し傾斜夾長と修正夾長が一致する場合については、④式において $l = l' = l_0$ とすれば、 $\theta \tan^2 \alpha + \tan \alpha - (\cosec \eta - \cot \eta - \theta) = 0$ [但し $\mu \frac{\bar{l}}{l_0} = \theta$] … ③

⑥式は仰角で前傾斜に対するものであるが、俯角で背傾斜の場合には

$$\theta \tan^2 \alpha' - \tan \alpha' + (\cosec \eta' - \cot \eta' + \theta) = 0 \quad \cdots \text{⑦}$$

⑥及び⑦式から、

$$\tan \alpha = \frac{-1 + \sqrt{1 + 4 \theta^2}}{2 \theta} \geq 0 \text{ また } \tan \alpha' = \frac{-1 - \sqrt{1 + 4 \theta^2}}{2 \theta} \geq 0 \text{ 但し } \begin{cases} \lambda = \cosec \eta - \cot \eta - \theta \\ \lambda' = \cosec \eta' - \cot \eta' + \theta \end{cases}$$

前二式を0ならしめるのは、 $\eta_0^{(1)} = \pm \left(\sin^{-1} \frac{1}{\sqrt{1 + \theta^2}} - \varphi \right)$ [(符号同順) 但し $\varphi = \tan^{-1} \frac{1}{\theta}$] … ⑧

⑧

④⑦⑧式から図-5、

図-6が求まる。即ち縦角と θ に対応して修正夾長と同一の傾斜夾長を与えるためのロッド傾斜角が求まる。傾斜夾長に基づく水平距離及び高低差は、⑨⑩式で表わされる。

また無修正の夾長即ち傾斜夾長をそのまま用

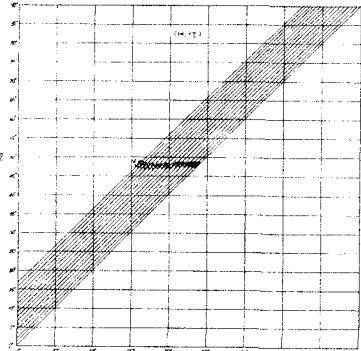


図-5

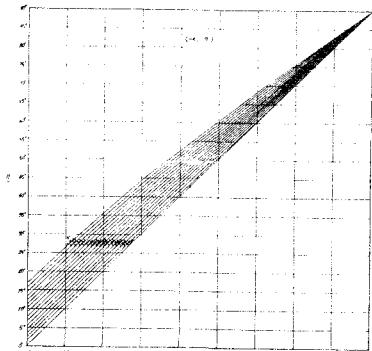


図-6

$$E = K \cos \alpha \cos(\alpha - \eta) [l' + \mu \bar{l} \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \}] + C \cos \alpha$$

$$H = K \sin \alpha \cos(\alpha - \eta) [l' + \mu \bar{l} \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \}] + C \sin \alpha$$

… ⑨ いた場合のそれぞれの精度は⑪式
… ⑩ で表わされる。

$$\text{仰角の場合 } d_E = d_H = \left| \frac{1 + \theta \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \} - \cot(\alpha - \eta)}{1 - \theta \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \}} \right|$$

(+前傾斜, -背傾斜)

⑪

$$\text{俯角の場合 } d_E = d_H = \left| \frac{1 - \theta \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \} - \cot(\alpha - \eta)}{1 - \theta \{ \tan \alpha - \tan(\alpha - \eta) \}} \right|$$

(同上)

水平距離及び高低差の誤差の大きさは極めて大きいものであつて、仰角で且つロッドが前傾斜及び俯角で背傾斜の場合には図-4の η_m で第一回目の極大誤差を生ぜしめ、漸次減少して図-5、図-6で与えられる傾斜角 η_m においてそれぞれ真の夾長を与え、再び誤差は増大していく。仰角で背傾斜及び俯角で前傾斜の場合には、誤差は増大するのみであるから注意を要する。あとがき 本研究の計算に助力を載いた防衛大学校土木工学部 岩井 正氏に厚く感謝の意を表するものである。

参考文献 1) 大測量学 上巻 石島八郎 2) Elementary Surveying Vol. I

Braasch and Bosma 3) Handbuch der Vermessungskunde Bd. I Jordan-Eggert